

No-reflow のこと

林英宰

河内総合病院心臓センター



[略歴]

林 英宰(りん えいさい、Lim Young-Jae)

1954年 大阪生まれ
1982年 韓国国立ソウル大学医学部卒業
1982年 大阪大学医学部第一内科入局
1983年-1986年 香川医科大学第二内科医員として松尾裕英教授の指導下で心臓超音波学を研修
1986年 河内総合病院循環器科医員として赴任
2007年 同 副院長、心臓センター長
1983年から現在に至るまで、主に心エコー法に関する臨床研究に従事

1991年11月のことである。もう20年も前のAHAのことである。私と伊藤浩先生(現岡山大学医学部循環器内科学教授)とはアナハインのコンベンションセンターエリアにあるマリオットホテルのロビーを二人で歩いていた。すると向こうから、当時、既にコントラストエコーの分野では世界の権威の1人になっていた Sanjiv Kaul先生がやって来た。私は以前の自分の論文の件でやり合っていたので旧知であった。我々二人を認めると、どういう関係か訊いてきた。私が“ライバルだ”と答えると怪訝そうな顔をしたので、この英語にはあまりよくない意味があるのかと思い、“かつ、ベストフレンドだ”と答えると、初めてにっこりして、“Good!”と言った。Kaul先生は伊藤先生に”君の論文のことで話がある。ぼくの部屋に来てくれないか”と言った。実は、彼のCirculationに投稿中の論文が最終の査読者であるKaul先生のもとに来ていたのであった。後で帰ってきた彼に訊いてみると、“Contrast defectみたいなあやふやな言い方をしないで、No-reflowとはっきり言って、discussionで応じなさい。そうするなら私はOKを出す”と言われたとのことであった。結局、彼はKaul先生の助言に従い、彼の論文が世に出た。これが後ほど何千回も世界中の研究者から引用されることになる“Lack of myocardial perfusion~”という論文の誕生に関する話である。そして彼はその後、5年間に計5本の心筋コントラストエコーに関する論文をCirculationに連続で発表するという獅子奮迅の働きをすることになる。もしあの時、彼がno-reflowという言葉を使わなかったとしたら、あの論文はたとえ発表されたとしてもあれほどのインパクトを与えることはなかったのではないかと思う。またその後の彼の活躍もあれほど大きくはならなかったのではなからうか。今思えば、まさに20年前、私は一つの偉大な論文の誕生と同労の研究者が世界に出ていく瞬間に立ち会ったのであった。この領域における世界の最先端の波の一部が、あの時確かに、マリオットホテルのロビーの赤い絨毯の上に来ていた。このような無数のエピソードの積み重なりの上に医学の進歩はあるのであろう。あの時、あの場において、学問の進歩していくダイナミズムを形あるものとして目撃できたことに私は誇りを覚えるし、そのことを忘れない。